

佳作

何気ない一言で…

神奈川県立花学園高等学校一年 齋藤 大碧

この日も普段と変わらずに時間が過ぎようとしていた。一日暑かった。今年の夏は特別に暑い。僕は夏休み中も陸上部の練習で汗を流し、練習が終わるとつい親に車で迎えをお願いしてしまう。普段は、自転車か徒歩で通学をしているが、夏休み中はそれも面倒に感じてしまった。なぜなら、母の仕事も夏休みに入り、学校と同じ期間中は、自宅に居てくれるからだ。

部活動が終わると決まって僕はラインで「迎えよろしく」。そして、母から「了解」。このやり取りが日課のようになっていく。車が到着して乗り込む時に必ず「サンキュ。」

と伝えるが、母は、

「お疲れ様、暑くて大変だったね。」

「こんな中、歩いて帰りたくないよね。」

と、いつも僕の気持ちを察して返してくれる。その言葉は魔法のように、疲れた体と心を癒してくれ、自然と穏やかな気持ちになった。だから毎回、片道五分の車内の

会話は弾んでいる。この時間を母は、正直どう思っているのか、毎回の事で面倒と思っているのではないか、そんな事を考えた時もあったけれど、今となれば日常茶飯事、その魔法の言葉もただただ心地よく、心に響く事もない。気付けば何も感じない僕になっていた。

そして、普段通り自分の時間を過ごし、夕食の時間になった。いつものように家族で食事を始める。母が、「今日の味噌汁の具材の大根が固いかも…。」

と話していると弟が、

「確かに。でも、大丈夫だよ。」

と伝えている。僕も確かめる。確かに少し固い。固くは感じたが、まあ、食べられなくはない。そう思っていると、「どう!？」

と父と母に聞かれた。僕は、

「歯ごたえがあって美味しいよ。」

と何気なく言った。その瞬間、何故か父も母も顔を見合わせて驚き、明らかに食卓の雰囲気が一変した。父と母だけが喜んでいる。おまけに母は、何故か目に涙を浮かべていた。僕は一瞬の出来事で何がなんだか全く理解が出来ずに戸惑った。すると母が、

「優しさって大事だよ。固いと言われるかと思ったけれど、作ってくれた人の事を思えばそんな事は言えないよね、その伝え方、誰も傷つかなくて素敵だね。」

と。父も続けて、

「言葉の選び方って、とても大切、今の答え方は正解だ。」

と言っていた。母の涙は、喜びと嬉しさからくる涙だったのだとその時に確信した。僕の何気ない一言で、こんなにも父と母の心が揺れ動かされていたとは想像もしていなかった。何だか僕まで嬉しくなった。もし、「固くて食べられない」とでも言っていたら、この楽しい食卓はどうなっていただろうか。何気ない一言で相手を悲しませたりする事も簡単に出来るしまうのだと改めて実感した。言葉一つで状況が変わってしまうのは何とも不思議だ。

思い返すと父と母は常に僕や弟に「自分の何気ない言葉で誰かを傷つけたら、嫌な思いをさせてしまう事がないように、自分の言葉には責任を持って過ごさなさい」。「自分が言われて嫌な言葉は、相手と同じ。相手の立場になって考えてね」と言っていた。その話になると、またか：と思いつつ、「そんな事、分かっている」と簡単に受け答えをして流していたが、今まさにそういう状況が起きていたのか。やっと父と母の言葉が胸に刺さった気がした。

そして普段、僕が使っている言葉一つひとつも相手にどう伝わるのかは、相手次第になってしまふ。だからこそ、大事に言葉選びをしなくてはならない。人は誰かを傷つけたくて言葉を発していないだろうし、お互い嫌な

思いをしないで過ごせるのが一番良いに決まっている。

そんな社会であれば誰もが過ごしやすい未来になるはずだ。だが、当たり前のように思っている事が一番難しい。それは、人それぞれ価値観も違うし、個性も大事にされている社会だからだ。だからこそ、まずは僕が気をつけなければならぬ。父と母から言われている言葉を胸に刻み、母へ伝える「サンキュ」を「いつもありがとう」に、変えてみる事から始めてみようと思う。そして、この先もたくさんの人と出会い言葉を交わすであろう。僕自身も言葉の重みを感じながら、言葉選びを間違えないように、人との繋がりがや絆をより深め、心に響く言葉を見つけてながら過ごしていきたい。